

文部科学大臣 萩生田光一 様
文化庁長官 宮田亮平 様

こんにちは、

ぼくはあいちトリエンナーレの開幕前から、出展アーティストのラインナップを見てワクワクしていました。こうした展示ができるくらい日本の社会は寛容になったのか、と新鮮な驚きを感じていたのです。そして実際、九月の初めに名古屋と豊田を訪れました。閉ざされた展示はあったものの、ホー・ツーニエンさんの旅館アポリアや高嶺格さんのプール、田中功起さんの映像空間など、印象に残る作品はいくつもあります。今回トリエンナーレが投げようとした問いが未来へ受け継がれ、日本社会のキャパシティが広がる契機になれば良いと楽天的に考えていました。

だからぼくは、今回文化庁が下した「あいちトリエンナーレへの補助金交付中止」という決断にすごく驚いたのです。

この決定は、元在日朝鮮人であるぼくにとって既視感を覚えるものでした。そこで再確認したのは、昔から常に心につきまとう「日本」に対する無力感と諦めの感情です。

アーティストは今回の決定を糧に、日本で、あるいは日本を出て活動することもできます。現にぼくは主に日本国外で制作活動をしてきました。しかし、日本に住む観客の大部分はそうもいかない。この決定の後、未来の日本の観客たちは、どのような「日本の」アートに接することになるのでしょうか？ 手続き上の不備を建前とする懲罰と牽制から派生するそれは、お二方が理想とされるものなののでしょうか。

ぼくはそこに強い危機感を抱いています。諦めきれずにこうして萩生田さんと宮田さんへ手紙を書いているのも、未来の日本に住む家族や友人たちを思うからだし、自分の生まれた場所を大切にしたいからです。

よってぼくは「あいちトリエンナーレへの補助金交付中止」の決定には反対であり、不交付の撤回を求めます。

Yuni Hong Charpe
2019年10月5日